第2章 特別支援学校図書館の様子

視覚・聴覚・肢体・知的学校図書館、読者の特性とサポートが書かれています。

最初が横浜市盲特別支援学校の紹介。三重盲学校と比べることはするまい……ないものねだりをしてはいけない……生徒数も違うだし、三重も思われているほうだし、思いつつも、図書館の見取り図や取り組みを見ると、うらやましさが先にたちます。読書支援のための機械も紹介されています。

また、三重盲学校でも重複障害（視覚障害に他の障害を併せ持つ）の子どもたちも増えており、機械を使いこなせない、点字等の文字をもってない子どもたちへのサポートは、他の特別支援学校のサポートが参考になることがわかりました。

逆に聴覚・肢体・知的メイド活用のところに視覚障害に対応していた対面朗読・音読・拡大・DAISY 図書の他の障害児への活用が書かれていても、もっと特別支援学校同士が実践やノウハウの交流をしていく必要があることを実感しました。

知的障害のある子どものサポートのところには、絵文字（ビクトグラム）等をつかった本など、やさしく読める本（LL ブック）の説明もあります。

著作権法の改訂で、学校図書館でもマルチメディア DAISY 図書の作成ができるようになりましたが、今はパソコンを使いこなせない自分で読むことが難しく、ネットになっています。今後電子図書との関係を進化すれば、もっと使いやすい機器等、読みやすいものになっていくかと思います。図書館としろにどう対応していくか、別の問題となっていくと思いますが。

第3章 特別支援学級・通常学級

特別支援教育が始まり、今まで障害と認められていなかった子どもたちのニーズの掘り起こしとサポートが、授業等で大きな課題となっています。学校図書館でもとても大きな課題です。

それまで学習障害（LD）、高機能自閉症、アスペルガー症候群、注意欠陥／多動性障害（AD/HD）等の子どもたちは通常学級に入っていました。

私が以前に勤めていた高等学校でも、今考えれば
これらの障害を持っていたのだと思う生徒たちがいました。補習、補習、でもできない、を繰り返してきた生徒たちは、高校生になると「できない」ではなく「したくない」と言って抵抗したり、無気力になっていくことが多かったように思います。

先日開いた講演会では「ディスレクciaは字が読めいないわけではない。字が読めないわけではない。スララと正確に読み書きができないのだ」と述べられました。そのため、ついつい誤解されて「さぼなっなくでです」、「別な介され子ども見はして出といできディンにく」で、目のが出ブながりちと簡単にです。読書支援の機器が整備され、見出し等の工夫によって学校図書館がその子どもたちにとっても楽しい場になるといいと思いました。

この本に書かれているように「特別なニーズをもつ子どもたちが利用しやすい図書館はすべての子どもたちにとって利用しやすい」のですから。

イギリスやアメリカの進んだ特別支援の様子も紹介されています。スチューデント・ライブラリー・アシスタントという制度がおもしろいと思いました。特別なニーズのある生徒が支援してもらうだけでなく、他の誰かの支援をすることは、その生徒の自信につながり、育ちにつながっていくと思います。

LLブックはスウェーデンが発祥ですが、国の補助があり、年に30冊の新刊があるとか。日本では採算がとれなくて、なかなか発売できないとの対照的です。読めないからと、子ども本を勉強でも反発する生徒たちに、大人っぽい装丁のクック・リーディングブックが提供できればいいなと思います。今後の出版に期待したいです。

第4章 共に創る

共に創るには学校図書館がきちんと「ある」ことが大切だと思います。残念ながら三重県でも12校の特別支援学校のうち3校にしか学校図書館司書はいません。各学校12学級以上ないと司書教諭は置かれません。司書教諭に発令されたとしても時間軸減はありません。ポランティアさんは特別支援学校には欠かせないものですが、この本に指摘されているとおり、学校図書館に「人」がいない状況では「コーディネート不足」「図書館活動の欠け」「ポランティアの専門性のはじづき」が起こってしまいます。

本校では、音読図書を他の視覚障害支援機関等からお借りします。でも、「閣下ませんでした」と言われることがあります。本校の視覚障害の先生方は、スピード８とか９とかで早聞きをされます。そうすると音楽時の生活雑音（外を通過する車の音等）やアクセントで、聞き取れないものが残念ながらあります。著作権法の改正で、公共図書館や学校図書館でも音声化や拡大化ができるようになりましたが、環境づくりとポランティアを育てることはこれからの大きな課題でしょう。

本当に身近なところに図書館があり、そこに支援してくれる「人」がいなければ、子どもたちは「本」や「読書」と出会えません。「国及び地方の教育行政」に支援をお願いしたいと思います。

千葉県立塘川学園の本の実践も紹介されています。特に、鳥取県立図書館が特別支援学校図書館にサービスを始めるきっかけになった、特別支援学校の司書教諭の方の名は、全国どこでも共通だろうと思います。それに素直に耳を傾け、すぐに支援を打ち出された鳥取県立図書館の柔軟さと活動力は、うらやましい限りです。「県立図書館には県内さまざまな図書館を後方支援するという役割がある」から、「特別支援学校図書館があれば、それもまた当然のごとく支援する」と言い切れる県立図書館が、全国にいくつあるのでしょうか。

インターネットの利用も含め、大きな輪になって特別な支援を要する子どもたちに、読書の楽しさを伝えられる社会になっていってほしい。これも、切なる願いです。

この本に紹介された学校・学級は、図書館の整備・読書教育が熱心に行われていますが、残念ながらそれでも学校もたくさんあります。この本が“指導”の解消につながるきっかけになるように。

（かいじょう かずみ 三重県立宮学校司書）